fromスイス◉中 東生
Shinobu Naka

チューリヒ歌劇場シーズン最後の新演出《トゥーランドット》、他

チューリヒ歌劇場の2022／23年シーズン最後の新演出となるプッチーニ《トゥーランドット》（フランコ・アルファーノ補作）は、カラフ初役のビョートル・ベチャワが不調だという前評判が持ち上がるなか、6月18日のプレミエを迎えた。

セバスティアン・バウムガルテンの演出は、客席に入ったとたんに目につく舞台装置からしてマンガチックだ。彼はプッチーニのオペラが好きだというが、リューに深い思い入れがあったプッチーニを無視し、血の通っていない超能力者クローンのように仕立て上げたためか、普段は温かいローザ・フェオーラの歌唱も心にしみない。フェミニズムの典型として描かれているトゥーランドット姫のほうがより人間的なのは、熱く歌うソンドラ・ラドヴァノフスキーだからだろうか。登場人物はコスプレをしているようだが、その効果かピン、パン、ポン（劇中の道化役の役人）のシーンは飽きさせなかった。もちろん抒情的でないフレーズを美声で聴かせられるピン役のチャン・シャオメン、パン役のイアン・ミルン、ポン役のネイサン・ハラーという歌手陣と、そして「プッチーニがみなに愛されるゆえんとなる抒情的な部分と、そうでない部分のバランスが成功の鍵」と分析するマルク・アルブレヒトの功績であろう。彼の棒もリューのアリアには冷たいが、それ以外はオーガニックな演奏で、譜面を深く読み込んでいる印象を与えた。さすが、「現行の《トゥーランドット》は詩的でなく、アルファーノの音がする」と、リューの死で幕を閉じる決断を下すだけある。とくにベチャワを抒情的に歌わせており、病後だという彼の役デビューを支えたが、「愛に燃える君がほしい」と歌う部分でのみ、無敵感のあるベチャワの高音が完全に割れた。冒頭から下方に引っぱる歌いかたで、リスクを取りつつ上手に乗り越えて来たツケが回ってきたのだろう。しかしすぐに立て直し、アリア〈誰も寝てはならぬ〉では、鼻の共鳴区を駆使して上手く切り抜けた。この発声を全レパートリーに使えるようになったら、さらなる進化を遂げるだろう、と期待を抱かせたが、3公演を歌ったあと、残りの4公演をキャンセルした。

チューリヒ歌劇場の《トゥーランドット》から。2022 /23 シーズン最後の新演出上演だった
©Monika Rittershaus

6月12日、フランスの歌手サビーヌ・ドゥヴィエルのリサイタルは、4月のドリーブ《ラクメ》成功の効果か、空席がほぼ見あたらなかった。母国語のフランス歌曲ではなく、すべてドイツリートで勝負し、挨拶コメントも入れたため、ドイツ語も話せると初めて知った。圧巻は冒頭のベルク。ハイソプラノなのに胸声も安定し、綺麗な、柔らかい声で歌うとベルクですら甘くなる。そしてモーツァルトでは、この柔らかな歌を聴けるだけで、ただただ幸せと感じさせた。誰もが歌うような《すみれ》も高度な芸術作品に仕上げてしまう。R・シュトラウスにはもっと肉厚なフレージングが欲しかったが、声の美しさは堪能でき、最後の「愛」だけでも、R・シュトラウスを歌う意義があると思わせた。

今季から就任した新しいバレエ・ディレクターのキャシー・マーストンの振付で、伝説のチェロ奏者ジャクリーヌ・デュ・プレを描いた《ザ・チェリスト》が披露された。前任者クリスティアン・シュプックは、ベルリン州立バレエ団総裁のポストに就くためチューリヒを去るのだが、《ザ・チェリスト》はその喪失感を癒した。当バレエ団の前田明里には、グループ内ソリストのなかでも、特別強いスポットライトが当たっているのかと思わせる輝きを放っていた（6月20日所見）。ジュニア・バレエのころからチューリヒでの活躍が目ざましかった前田だが、シュプックに引き抜かれてベルリンへ移籍する。

ビュルゲンシュトック音楽祭

アンドレアス・オッテンザマー（cl）とホセ・ガヤルド（p）が率いるビュルゲンシュトック音楽祭、冬のオープニング公演を2月にレポートしたが、6月3日に夏の音楽祭が、冬と同じくチューリヒのライヴハウス「カウフロイテン」にて、dマティネで披露された。今回の豪華ゲストはロランド・ビリャソンで、聴衆の心を掴むトークと熱い歌を聴かせた。ユリア・ハーゲンのラフマニノフ「チェロ・ソナタ」や、オッテンザマーとガヤルドと紡ぐブラームス「クラリネット三重奏曲」も美しく、自然体で心の底から楽しむ聴衆が印象的だった。

細川の「ヴァイオリン協奏曲」がスイス初演

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団で3月2日に世界初演された細川俊夫「ヴァイオリン協奏曲《祈る人》」が、6月14日にルツェルン交響楽団により、初演時のソリスト樫本大進と共にスイス初演を行った（所見は15日）。高く伸びるKKL（ルツェルン・カルチャー・コングレスハウス）を満たす弱音で樫本が弾き出したささやきのようなヴァイオリンが語る宇宙は時代も国境も超えて、人間と自然を共鳴させていく。細川氏はこの曲で「日本人作曲家」という枠を超えた。

この曲のスイス初演は、世界初演時の指揮者パーヴォ・ヤルヴィによってチューリヒ・トーンハレ管弦楽団がはたすものと想像していたが、ルツェルン響で首席指揮者ミヒャエル・ザンデルリンクがていねいに仕上げていた。後半のブルックナー「交響曲第4番《ロマンティック》」も繊細に歌い上げていた。